

題名：若年層の性別役割分業意識に影響を与える要因について

釘宮 真梨子

要旨：

「男性は仕事・女性は家事・育児」という性別役割分業意識は1970年代に確立した。その意識が若年層の男女においてもいまだに存在していること、その要因となっている物を明らかにするために今回の研究を行った。

第一章では、性別役割分業の確立時期や、それがどのように変化してきたのかを述べている。「夫は仕事、妻は家事・育児」という形で存在していた性別役割分業が、女性の社会進出により、それまで存在していた性別役割分業ではなく、「夫は仕事・妻は家庭と仕事」という新たな性別役割分業も松田（2001）によって指摘されている。

第三章では性別役割分業の変化、現状、雇用状況による稼ぎ手役割の変化、家庭・教育における性別役割分業、性別に対する固定観念など若年層の性別役割分業意識に影響を与えている要因となるものの専攻研究をもとに章を展開した。

第四章では「性別の固定観念が性別役割分業意識を保守化している」、「社会的に成功する」という意識が男性の性別役割分業意識を強固にする」という仮説を設定し、男女7名ずつにインタビュー調査を行った。

第五章では調査結果をもとに、インタビュー調査内容を性別役割分業に影響を与える要因として考えられる項目を設定し、それに沿って聞き取った内容を個別に分類した。ここで設定した要因は「性別役割分業意識への影響要因」と「性別役割分業意識を強固にする要因」と「その他の要因」である。今回の調査で明らかになったことは、男女共に「子育て」は妻が担うべきものだとする意識が強かったことである。その意識のもとになっているものが性別に対する固定観念であった。細やかな気遣い、心配りが女性らしいとされ、子育てでも女性のその特性が必要になるのではないかと理由が多くあった。性別役割分業の中でも家事役割については、どちらが担うべきだという意識はなかったが、育児役割については男性でも手伝える部分は手伝えるが、主に女性がすべきものであるという意識であった。

また、結婚後も就業を続けるかどうかの質問に対して、子どもが生まれたら育児に専念したいという意識が強く、男性も子どもが生まれるまでは就業を続けてもいいが、子どもが生まれた後は育児に専念してほしいという意識であり、性別役割分業において育児の重要性が明らかになった。そして、性別役割分業に影響を与える要因として、家庭環境や地域環境も考えられるのではないかと考えている。それにより、どのようにすれば育児役割を男女共有のものとするのか明らかにできるのではないだろうか。